◇究める道を求めて◇ 109

国家の将来は国民のレベルにある

株式会社キャリアコンサルティング
代表取締役社長
室舘（むろだて） 勲（いさお）

室舘　勲 氏

聞き手
矢野　弾
（矢野経済研究所特別顧問
潮流社社長）

――会社設立から十周年、おめでとうございます。現在の、社会人教育の会社を立ち上げられたきっかけは何でしたか。

室舘　ありがとうございます。私は二十五年前に青森から上京しまして、そこから十五年間は社会人教育の現場で下積みをしておりました。様々苦労する中で、新規事業立ち上げのきっかけがありました。下積みをしている中で、このままでは日本がダメになってしまうのではという危機感が湧いてきて、私が二十代の若者を教育していこうと決意しました。

――歩まれた十年間を振り返って、一番思われることは何ですか。

室舘　若者に人間性やリーダーシップを身につけてもらうために、どんなやり方で教えていけば実力がつくのかを考え続けた十年間と言っても過言ではありません。武道、スポーツ、芸術、歴史など、ありとあらゆるものから、とにかく私自身が学んで成長しようとした十年でした。しかしながら、私が教えたい事と、若者が教わりたい事にはズレがありました。このズレを解消し繋ぎ合わせる事に苦労した十年でもありました。

――十年経った今、感じられていることは何ですか。

室舘　日本を更に良くして、しっかりした国にしていくためにはどうすればいいかと考えた時に、一つ思うことがあります。この先も日本は民主主義のまま進んでいくと思います。民主主義ということは、一票の積み重ねで日本の未来が決まるわけです。一票の積み重ねということは、票を入れる有権者の質を積み重ねるという事です。有権者の質そのものが国家の質、国家の品格を左右するのです。有権者の質が低ければ、公のお金を私的に流用してしまうような政治家に一票を投じる事にも繋がります。しかし、質が向上していけば、上辺だけに捉われずに、政治家の善し悪しを考えていけることにも繋がります。ダメな政治家は落としたらいいですし、良い政治家は発掘してどんどん応援したら良いと思います。非常にシンプルな事で、国家の将来は国民のレベルにかかっているという事です。だからこそ、有権者の質、つまり二十歳を超えた人の質・レベルがどうすれば上がっていくのか、何をしていけば良いのかをずっと考え続けています。

――一票を入れる国民のレベルを上げるという、その切り口に辿り着き、現場でやっていくのはなかなか難しいことです。

室舘　そうですね。そこで、国民の質とは何かという事ですが、自分の事だけを考えるのでは

なく、周りの為や日本の為にと考えられるという事です。その為には、国民一人ひとりが「日本が好き」「祖国が好き」という気持ちを持っていることが大前提になるのではないかと思います。しかしながら、先の大戦から約七十年の間に、反日的な思想や、日本より外国の方が好きだ、という意見が多く聞かれるようになりました。日本が好きだということを一人ひとりが感じる為には、母親がキーになると感じています。これは「三つ子の魂百まで」「子供のしつけは『つ』のつく歳まで」という言葉にある通り、三歳までや九歳までの教育が大切になります。その間、子供は誰と一緒にいる時間が一番長いかというと、当然母親であり、母親の知性が最も影響するということです。

――女性、特に母親ということですね。

室舘　母親の価値観がそのまま子供に入るわけですから、母親の知性が高ければ、子供の可能性がより広がります。いま安倍総理が、女性の社会進出に力を入れておりますけれども、未来の日本を作るには、母親がキーポイントだということです。身体に良い食生活、良質な睡眠など、母親になる前から健康であってこそ、健康的に子供を宿し、育むことが出来ます。正しい道徳観を持つことで、親が子を殺すというような悲惨な事件を回避でき、正しい歴史観を持つことで、国旗・国歌の問題や外交問題などをしっかりと考えていける子供を育てることが出来ます。様々なことに母親は影響を与えます。いかにして女性の価値観教育をしていくのかが大事だと思っています。

――現代では、女性自身がもっと自分の立場や能力を高めたい風潮がありますが、会に来られている二十代の女性はどのような考えをお持ちですか。

室舘　我が会に集う女性二百人ほどの話を聞いてみると、社会的立場の向上とともに結婚して子供も授かりたい、家庭を大切にしたいという方が大多数です。当然、少数派は少数派として良いと思っています。ただ、結婚をしたい、子供が欲しいという女性の思いは、時代が変化しても存在していることは確かだということです。

――結婚や出産をしたいと女性が思ってくれているということは、嬉しいことですね。

室舘　はい。ただ、新聞とかテレビといったマスコミだけを見ていると、どうしても特徴のある記事や、センセーショナルな事で番組を作る傾向があります。やはりマスコミばかりを見ていると、少し偏ってしまうと思います。私が感じているのは、今の社会は、少数派がいつの間にか多数派のように構図を変えて行動しているように感じます。女性の結婚の問題だけではなく、一方向だけを見せるような偏った報道の構図があるように思います。少数派、多数派、様々考え方はあるのが自然ですが、絶対的な本流、多数派とは何かを考えることは必要です。ただこの現代は、その本流を声を大にして言うと批判されて、揚げ足を取られる世の中になっています。だから知識人やリーダーが、講演やウェブ上で警戒し発言に切れ味がなくなっているのではないかと思います。

――リーダーの発言力は大切です。教育の中でリーダーシップという要素を盛り込んでいらっしゃいますが、どういったことを教えられているのですか。

室舘　リーダーシップの基礎を身につけるという事を目指した「しがく式」というカリキュラムを作り、「リーダー」「コミュニケーション能力」「教養」「ノウハウ」「健康」という五つの柱で教育をしております。特に「健康」に関しては、私は教育の課題の一つと捉えて取り組んでおります。現代の若い人たちは健康そうに見えて、実はそうではありません。現代は食品添加物が多く含まれた食事で溢れています。それらを多く食べて育った母親が産んだ子供は既に、食品添加物の悪い影響を受けていると言われています。食事をはじめ、健康に関して正しい知識を持つ事はリーダーにとって非常に重要です。また、基礎体力がないと、リーダーとしては戦えません。健康な身体を保ち、体力をつけると

いう事が一つの課題になります。そのために若いうちから、食事、睡眠、運動など日頃の生活をどう改善すれば良いのかを学べる場を作っています。

――他に課題は何がありますか。

室舘　言うべき時に言えない、いわば自己主張が足りないという事があります。例えば教師の団体で日教組ですとか、外国でも最近は日本に対してとても厳しいことを言っている韓国や中国の団体があります。それが元で海外に住む日本人がイジメられています。それに対して日本はほとんど反論できていません。元々日本人は、自己主張が弱く、言い合う事やディベートが苦手な傾向があります。しかくでは、入会から七、八カ月経ったころに、「ディベート」にチャレンジさせています。一つのテーマについてその場で賛成と反対に分かれて討議します。させてみてわかったことは、普段おとなしい子でも、しっかり準備をして材料を調べてくると、しっかり戦えるのです。逆に準備が無いと、ただ声が大きいだけで論理性に欠ける、という事もよくわかりました。

――論理を極めるということですね。心理を極め、実践を極めると。これは大事ですよ。それが社会人であり人間力でしょうね。

室舘　そうですね。その主張するというところが矢野先生から学んだ「論理の格闘」という事ですね。現代の日本人にはこの力が無いと国を良い方向には導くことは出来ません。しかくに来られている教職員の方から聞く話には、教職員の職員会議で三、四十人が討議する中、ほんの一部の日教組系の人間が、「これがいいんだ！」と声を荒げると、特に意思のない方は、その意見に流されて賛同してしまう。教職員全員を教育しなければならないというわけではなく、そういった場で論理の格闘に勝つリーダーを一人でもしっかりと育てていけば良いという事です。

――リーダーとなる一人を作ることが大切ですね。

室舘　日本は過去に、二十万三千六百六十人ものリーダーが追放されました。大東亜戦争での敗戦を機にＧＨＱが行った公職追放令です。教育の場では校長先生やＰＴＡの会長、経済界では役員や部長クラスの方、もちろん政治家や地方の実力者など、日本を良くしたいという想いの強いリーダーが追放されてしまいました。そのことを知り、その逆を進めれば良いのだと思いました。校長先生、教頭先生、ＰＴＡの会長、企業では役員や部長クラスになるような人を育てる、つまりエリート教育をやっていこうと決めました。エリートというと、今の世の中は東大をはじめ高学歴の方という印象が強いですが、私の考えるエリート像は、やはり、祖国のことを愛して、人間力があって、公精神があるような人です。そのような人こそエリートであると思います。

――エリート教育を進めて、そして先ほどお話にあった、国民の質を上げなければなりませんね。

室舘　国民の質の向上の一つに、お金の使い方があると思います。私は、伝統的な物や手間暇のかかった物を良いなと思える国民が一人でも増えると、物を作る技術者が育ちます。例えば着物産業は廃れていっており、着物の職人などはほとんどいません。製糸場も国内に二軒しかありません。日本人が何に価値を感じるのか。良い物にお金を落としてほしいです。良い本を買う人が増えれば、良い作家さんが育ちます。テレビ番組も同じで、悪いテレビ番組と良いテレビ番組がある中で、良いテレビ番組を見れば視聴率が上がり、テレビ局は良いテレビ番組を作ろうとします。国民の質を上げる事とは、このように、お金・時間を何に使うべきなのかを、一人一人が考えられて判断できる。その価値観を育むことだと思います。

――その様な価値観の育成の取り組みの一つが、

国護り演説大会ですね。

室舘　その通りです。今年で第六回を迎えた国護り演説大会ですが、日本のことを護ろうとか、日本のことを考えようということを、私が語るのではなく、学んでいる方々、つまり二十代が語ることに意義があるのではないかと思い、開催しました。「国護り」と言うと自衛隊・消防士・警察官などという職業をイメージすると思いますが、それだけではなく、一企業の社員や学校の先生、介護・看護職の方などといった、聴衆の方と変わらない職業で、かつ同年代の方々が語れば、自分にも何か出来るんだという気持ちを持ってほしいという思いで始めました。毎年五百名程度の応募があり、皆さんが勉強して、国を護るという意識を高く持ってくれていることは非常にうれしく思います。

――素晴らしい取り組みです。他にも、靖國神社の参拝もしていらっしゃいますね。

室舘　はい。毎年一月三日に、靖國神社に集団昇殿参拝をしています。実は下積み時代から続けていて、今年で十六年になります。今では弊社の社員と会員合わせて六百名を超える仲間が集います。これは、若者たちに「感謝の気持ち」を持つという情操教育の一環でもあります。私たちが伝えている感謝は「両親への感謝」と「先人への感謝」が主です。例えば先の大戦で、同年代の方が身を挺してこの国を護ってくれたという事実は、約七十年経った今でも心に訴えてくるものがあります。靖國神社に集うという事には様々な意味合いを込めて続けています。また、二千六百年という日本の歴史を紡ぐことができたのは、皇室の存在が大きいと思います。私もそうでしたが、縁遠かった皇室という存在をもっと身近に感じてもらうために、皇居勤労奉仕で社員を連れて皇居のお掃除に行かせて頂いております。この活動を会員の大学生が真似をして、毎年、皇居勤労奉仕に行っています。皇室についても様々勉強させてあげられるようになりました。こういった事もしっかり若者に伝えていきたい事ですね。

――文化的なところで、ご自身は茶道を学ばれていらっしゃいますね。

室舘　遠州流茶道の、小堀遠州家元の直門として三年前から習っております。茶道には日本人特有の「察する文化」、お客様を察するという事が強く表れます。石田三成の三献茶という話がありますが、相手の要望を察して差し出すということです。また、準備においては、お客様のことを考えて掛け軸一つ、お花一つとっても、大変な準備を重ねます。そしてお茶のお点前では、一つ一つの動作に心を込められています。現代では、激しく動くことはあっても「止める」ということはなかなかありません。「察する」「準備」「心を込める」という、ビジネスの世界でも役に立つ感性と、忙しい現代人が見落としがちな「静」の空間の必要性を教えてくれるのが茶道の世界です。こういった日本の伝統文化、着物など、伝えていきたいことは多くあります。

――それらをより合わせていくことが未来に繋がりますね。

室舘　冒頭の話に戻りますが、民主主義である以上、国民の質が日本を作っていきます。お金を何に使うのか、伝統文化なのか、良い本なのか、そしてどの政治家に一票を投じるのか。その有権者の質の定義を、私は更に追求していき、教育していきます。

――次世代への取り組みを期待しております。今日はどうも有り難うございました。

■むろだて・いさお■
一九七一年　青森県生まれ
二〇〇三年　株式会社キャリアコンサルティング設立（教育事業、派遣事業、人材紹介事業）
二〇〇九年　「第一回　国護り演説大会」を開催
二〇一三年　リーダーシップの基礎を身につけるための新たな教育機関「しがく」を設立
就活支援「プレミアムスタイル」は二〇一四年四月入社の内定率九七・四二％を達成。著書に『夢を見て　夢を叶えて　夢になる』（致知出版社）、『まずは上司を勝たせなさい』（講談社）ほか、がある。